ざわざわと鳴る木々。
曇天。
十歳ばかりの少年。
ベンチに座っている。
眼鏡の下の瞳は、暗い空を見詰めている。
彼は何時間こうしているのか分からなくなった。
下ってきた山道の向こうにコンクリートの建物。
病院。
時折病院に向けられるぬばたまの瞳。
無い、回答。
「どないしてんな」
木の隙間から、唐突に関西訛りの声がかかった。
聞きなれない方言に、少年は目をぱちぱちさせる。
声の主は、にゅっと姿を現した。
黒いゴシック調のロングドレス。
黒い髪を肩まで伸ばし。
黒いシルクハットを被っている。
異様なのはその顔に、オペラ座の怪人のようなマスクを被っているところだった。
マスクの女は再度言った。
「どないしてん、こんなところに一人で」
よく見ると、その肌の白さから外国人と分かった。
「一人じゃない。お父さんと一緒だったんだよ」
少年は答えた。
「せやから、そのお父さんは何処行かはってん」
「分からない」
「分からない？」
「診察でなんて言われたか話したら、どこかに行ったんだ」
「どこかに行ったんだって、ほしたら、君はどうやって帰るんや」
「分からないよ。でも、どうしたらいいかも分からないから、ここに座ってるんだ」
淡々とした口調から、少年は人形じみた印象を与えた。
「はー、えらいお父さんもいたもんやな。携帯とか持ってへんの？」
「持ってない」

「お父さんの携帯番号は？」
少年はすらすらと番号を答えた。
女は携帯電話を取り出し、手早く番号を打って。
何回も鳴るコール音の後、留守番電話のメッセージに、
一言言った。
「ブチ殺したるで」
そのあまりのドスの効いた声に、少年が一瞬びくりとした。

↘↘↘つづきは
《おねショタ》アンソロジー『∞-infinity-』で！